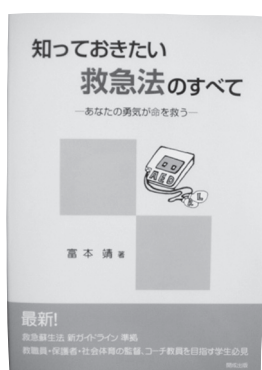


## 新 刊 紹 介

富本 靖著

『知っておきたい救急法のすべて  
—あなたの勇気が命を救う—』

押 谷 由 夫



2008年5月30日発行  
開成出版  
A5判 101頁  
定価 1905円 (本体)

初等教育学科准教授富本靖先生の待望の著書が出版された。先生は、長く附属小学校で活躍されていた。ご専門の体育では、附属小学校の象徴ともなった、跳び箱における前方倒立回転連続とび、などの実践的指導をはじめ、児童の身体的・運動能力的変化についての科学的分析研究は、学会や教育関係者から高く評価されている。

と同時に、先生は湘南育ちで、いわゆる湘南ボーイとして、海に親しみ、ライフセーバーなどの活動にも積極的にかかわられていた。そのようなことから、救急法については、自らの実践をベースとしながら独自に研究を深められ、日本医学協会（理事でもある）を

はじめとして、様々な研究会や講習会などで実践的な救急法の指導をされている。また、関係機関からの表彰状も授与されている。

今回上梓された本書は、そのような指導のなかから選りすぐられた、教員や保護者、社会体育の指導者等、子どもたちにかかわる人々にぜひ身につけてほしい救急法について、まとめられたものである。

### 簡潔・明瞭な記述と的確な場面写真

まず、気付くのが、簡潔・明瞭な記述である。冒頭に、「人命救助 標語」がページ全体を使って書かれている。「い・き・か・え・れ」である。「い」は、意識なし。「き」は、救急車呼んで呼吸を。「か」は、確認。「え」は、AEDを実行して。「れ」は、レスキュー呼吸（人工呼吸）で人命救助。実に的確である。

「救急法」なので、急を要する対応が必要である。当然理屈も大切であるが、むしろ実践（方法）を知り、それを追体験する中で、理屈を感じ取ることが重要であるように思う。本書は、そのことに主眼が置かれている。写真もふんだんに使われており、その場面場面での対応が的確に示されている。実際、本書を読んでいると、自然と手や体が動いてくる。そしていつの間にか、同じことをやって確かめている自分に気付く。

### AED・心肺蘇生法

「い・き・か・え・れ」の実践は、心肺停止からの蘇生である。本書では最初に、今日急速に普及しているAEDの紹介と使用法について、述べられている。機種ごとに使用法が紹介されているが、そのことで基本的な操作法が納得のうちに理解できる。

そして、あわせて心肺蘇生法について解説している。

ここでは、成人の場合、小児の場合、乳児の場合と分けて記述されており、そのことが、心肺蘇生法の理解と方法をより分かりやすくしている。と同時に、成人、小児、乳児の心肺蘇生法の共通性と違いを知ることによって、なぜこのような方法が必要なのかもおのずと理解できるようになっている。また、AED・心肺蘇生法についてはQ&Aの章を設けて、素朴な疑問を取り上げ簡潔に回答されている。そのことで、読者は実践への確たる自信をもつことができる。

### 異物除去、三角巾法、搬送法、止血法、海での救助法、登山での救助法、応急手当

そのほかに、本書で取り上げられているのが、上記のものである。これらについても実に分かりやすく即実践できるように記述されている。特に、日々の生活において、あるいは海や山でのアクシデントへの対応など、教師や保護者、子ども指導者にとって、すぐに役立つ救助法が述べられている。特に「第14章 応急手当」では、日常生活において常に起こりやすい怪我に対する応急手当の方法についてまとめられている。コンパクトな辞書と同様に、常に携帯してその都度活用できる本である。日本図書館協会の2008年度選定図書にもなっており、教師を目指す学生の必読書としたい本である。

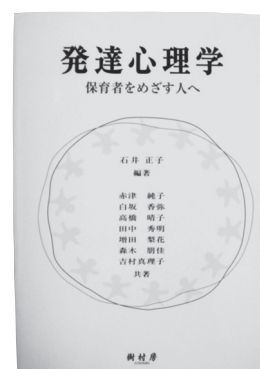
なお、「第12章 海における救急法」では、危険な海の生き物についての紹介と対処法について記述されているが、そこには本物そっくりの見事なイラストが描かれている。元同僚（現在本学科非常勤講師）の稲田大祐先生の作である。また表紙デザインはお嬢さんの作品である。生命の尊重とともに暖かさを感じる本でもある。

（おしたに よしお 初等教育学科）

石井正子編著

### 『発達心理学 保育者をめざす人へ』

田中 マユミ



2009年3月25日発行  
樹村房  
A5判 210頁  
定価2000円（本体）

### 保育者になりたい人の力になるエッセンス

発達心理学の本は数多く出版されているが、「保育者をめざす人へ」という副題が付いている本は、おそらく初めてであろう。一般の発達心理学の本とどう異なるのか、と考えながら丁寧に読んだ。

執筆者は大学で教鞭をとっている研究者・教育者である。何人もの学生に発達心理学を講義し、保育者を社会に送り出している。執筆者はその経験を踏まえて、はじめて子どもに向かい合う学生にとって基本的な発達心理学は何か、ということを考えながら執筆している。本書の読者は、保育者になることをめざして努力を重ねている人が中心である。読者の中には保育の現場を知らず、そこに展開される乳幼児の生活や保育者の役割等をイメージすることが難しい人もいるだろう。そういう人にも理解されやすいように、読みやすく、

わかりやすく書かれている。

本書の構成は9章からなり、まず発達の見方・考え方が述べられている。その後は、胎児期・新生児期から子どもの発達の時間的経過に沿って述べられ、親になるまでが丁寧に解説されている。また、たとえばパジャマの脱着、オムツの交換など、初心者向きの実践的ヒントも随所に見受けられる。

子どもの発達を理解するとき、発達を規定する要因は種々あるが、発達を推進するのは主体としての子どもの意欲であろう。意欲を引き出すのは、子どもの行動（経験）に対する大人の関わり、すなわち応答であり、子どもに対する愛情である。子どもが一生懸命取り組んだとき、その経験を受け入れ、認め、共に喜んでくれる人がいて、はじめて子どもは同じ経験を繰り返し試してみようという気持ちになる。子どもの感情を共有してくれる大人の存在は、発達を促進し、発達をあるべき方向へ向かわせる。保育現場での保育者の役割の中心はここにある、と言っても過言ではない。

読者は本書を通して、子どもの発達に保育者がどう関わればよいかを理解することができる。保育者をめざす人は、この発達に関するエッセンスが書かれた書物によって、どんなにか力づけられるであろう。

### 生涯発達を視野に入れた展開

子どもを保育園に預けている母親は、子育てに対して不安を抱えている人が多い。また、自己の職業人としてのキャリアと子育てとの間で悩んでいる人も少なくない。しかし母親は、妊娠、出産、子育てを通して、自らも人間として大きく発達している。保育者が母親の多重役割を理解し、専門的知識と技術をもって気持ちよく子育て支援をすることによって、母親の不安やイライラは解消（軽減）され、母親は良い状態で子どもと向き合うことができる。その意味で、本書にある現代女性のライフサイクルを理解することは、保育者をめざす人として特に重要な視点である。

子育てにおける父親についても言及しているのは時代を反映している。父親が子育てに協力的に関わることは、直接子どもに影響を与えるだけでなく、母親の子どもへの関わりにも影響を与える。家族はそれぞれの関係により、複雑に、多重に、影響を与え合っている。そして父親も母親と同様に、職業を通して受ける影響のみでなく、子育てを通して、人間的関わりの中で大きく発達する。

### 知らないことは好きになれない

いわゆる障害については、従来は、身体機能のマイナス面が中心に考えられていた。しかし、2001年に開かれたWHOの総会で採択された考えに基づいて、日本でも、いわゆる障害者のもっている生活機能をプラス面から見るように、視点の転換が行われた。障害は固定的な状態ではなく、時間的に変化するものと考えられている。本書ではいわゆる障害に対する新しい考え方により、発達障害についてわかりやすい説明がなされている。

何事も知らないことは好きになれない。知ることが第一である。多くの学生は子ども好きだが、それは可愛い子が好きで、困らせる子は好きではない。いわゆる障害を持っている子は、どちらかというと「困らせる子」であろう。困らせる子も好きになるには、いわゆる障害について学ぶのが第一である。「困らせる子」の気持ちを理解し、どのような人間的関わりが子どもの気持ちを安定させ、発達する芽を伸ばすのかについて考えたい。いわゆる障害をもっている子は発達を遂げつつある存在である。

（たなか まゆみ 東京未来大学教授 昭和女子大学名誉教授）